

研究ノート

ブダペスト及びその近郊における観光資源

—世界遺産を中心として—

**Tourist Attraction in Budapest and its Suburbs:
Focusing on UNESCO World Heritage Sites**

小野 健吉

Kenkichi Ono

和歌山大学観光学部教授

キーワード：ブダペスト、ホッローケー、世界遺産、ドナウベント、眺望地点

Key Words : Budapest, Hollókő, UNESCO world heritage, Danube Bent, commanding height

Abstract :

Budapest is a capital of Hungary and the largest city in the country, housing 1,750,000 populations. The city is mainly composed of two areas; Buda district on the western bank of the Danube River and Pest district on its eastern bank. Assets composing UNESCO world heritage site, “Budapest, including the Banks of Danube, the Buda Castle Quarter and Andrassy Avenue” are literally located in both districts of Buda and Pest, and the Danube. They are diverse from the standpoint of history and geology. For example, Buda castle and Mátyás church on the hilly Buda area have their origin in the 13th and the 15th centuries, and Andrassy Avenue and the Millennium Underground Railway were constructed in the late 19th century in the flat Pest district on the other hand. Some tourist attractions are found in the suburbs of Budapest. In the Danube Bent to the north of Budapest, Visegrad where royal palace was built in the 15th century and Szentendre which used to be a Serbian settlement are popular among tourists. Hollókő located to the 100 km north-east of Budapest is a small traditional Palócz settlement and is a UNESCO world heritage site. Through conducting a field work at major historic attractions of Budapest and its suburbs, this study observed that the commanding heights which used to be the viewpoints of rulers have transformed into popular viewpoints which also attract tourists. From the standpoint of traffic system, needless to say, public traffic services such as trains, trams and buses play important role as a whole.

I. はじめに

1980年代の民主化以降、西ヨーロッパ社会への傾斜を強めたハンガリーは、2004年のEU加盟に加え、シェンゲン協定に2007年に加盟したことで外国人観光者が増加し、現在は外国人訪問者数において世界23位（2016年）である。ハンガリーにおいて観光を目的とした訪問者（観光者）が最も集中するのは「ドナウ川兩岸とブダ王宮地区とアンドラーシ通りを含むブダペスト」として市街地の一定区域が世界遺産にも登録されている首都・ブダペストであり、あわせてその近郊にも観光者を集める都市や集落あるいは遺跡等の観光資源が散見する。フランスのパリ、英国のロンドン、イタリアのローマやフィレンツェ、スペインのバルセロナ、オランダのアムステルダムといったヨーロッパの主要観光都市に比べると、日本では取

り上げられることの少ないハンガリーのブダペストならびにその近郊の観光資源について、その現況を調査し、その特質等について考察を試みたいというのが本研究の背景である。

こうした背景のもと、先行研究や既刊の書籍・ガイドブック等も参照しながら現地調査に基づいたブダペストならびにその近郊の観光資源を紹介するとともに、現地で得た知見を踏まえた世界遺産としてのブダペストの特質と意義、ブダペストとその近郊の観光地の公共交通機関の状況と課題、俯瞰眺望の視点場の意義とその普遍性について考察することを本研究の目的とする。

そして、これらの目的を達するため、外国人観光者として公共交通機関のみを使用し、通常入手可能なガイドブックやパンフレットを用いながら世界遺産をはじめとしたブダペストならびに

その近郊の観光地を実際に訪れ、徒歩での回遊や写真撮影など観光者の視点で現地を把握するという方法を用いた。

Ⅱ. ハンガリーとブダペスト

1. ハンガリー

ハンガリーはヨーロッパの中央部に位置し、スロバキア・ウクライナ・ルーマニア・クロアチア・スロベニア・セルビア・オーストリアと国境を接する内陸国である。国土は東西約 400km・南北 250kmほどの大きさで面積は 9 万 3000 平方キロ。人口は 980 万人である（2017 年）。ハンガリーの国土を考えるうえで重要な位置を占めるのがドナウ川である。ドイツ南部に源を発したドナウ川はオーストリアを経てハンガリー北部に入り東流を続けたのち、首都ブダペストの北方ではほぼ 90 度方向を変えて南流する。この結果、ハンガリーはドナウ川によって概ね東西に二分されたような様相を示すことになる。地形的にみるとドナウ川以西は総じて起伏のある丘陵地であるのに対し、ドナウ川以東はアルフェルド（Alfold：大平原）と呼ばれる広大な平地である。

次に、ハンガリーの歴史を概観しておきたい。9 世紀末からマジャール人が定住して 10 世紀末にはハンガリー王国が建国されるが、13 世紀前半にはモンゴルの侵攻を受けて国土が荒廃。その後一時的に王国の隆盛期を迎えるものの、16 世紀前半にオスマン・トルコとの戦いに敗れた後、ブダペストを含む国土の中心部は 17 世紀末までその支配下にはいることとなる。1699 年のカロヴィッツ条約によりハンガリー全土がオースト

リア帝国の統治下におかれ、一時的な独立を経て 1867 年にはオーストリア・ハンガリー帝国が成立する。第一次世界大戦の敗北により領土の縮小を余儀なくされた後、ドイツにおけるナチスの台頭とともにファッショ勢力が形成され、第二次大戦では枢軸側に加わる。その結果、ソ連軍の侵攻を受けた。戦後の 1949 年からはハンガリー人民共和国として急激な社会主義が推し進められるが、1956 年には国民の反ソ連・反政府感情からハンガリー動乱が勃発。ソ連により鎮圧されたものの、ソ連による政治支配は弱まることとなった。さらに、1980 年代後半には民主化勢力が台頭し、ハンガリー共和国憲法施行によって 1989 年にハンガリー共和国（第三共和国）が成立した後は西ヨーロッパ社会への傾斜を強め、1999 年に NATO、2004 年には EU へ加盟した。さらに 2007 年にヨーロッパの国家間で国境を越える際に国境検査を要しないことを定めたシェンゲン協定に加盟したことで観光面での発展も目覚ましく、2016 年の外国人訪問者数は 15,828 千人と世界 23 位、ヨーロッパ諸国の中でも 10 位に位置する¹。

2. ブダペスト

ハンガリーの首都ブダペスト（Budapest）は、ハンガリーの中央北部に位置する。人口は 175 万人とハンガリーの人口の 20% 近くを占め、他の地方都市とは別格の存在感を誇る最大の都市である。地形的にみると、ブダペスト市街地は北から南に流れるドナウ川の西岸の丘陵地・ブダと東岸の平坦地・ペストで構成される（図 1）。歴史的には、ローマ時代の軍営

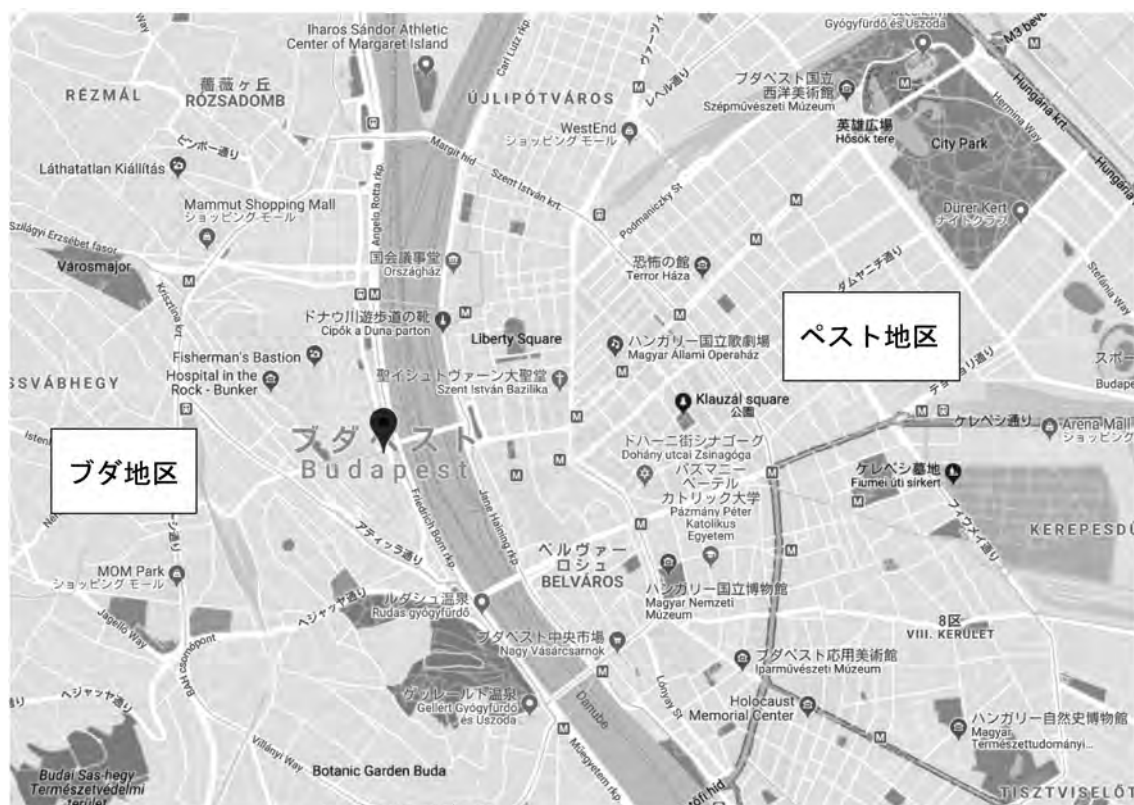


図 1 ブダペスト中心部（グーグルマップ <https://tripnote.jp/hungary/place-budapest/map> に地区名を追加）

地から都市に発展したオーブダ地区（ブダ地区北方）に起源をもち、13世紀にモンゴルの侵攻を受けて国外に逃れていたベーラ4世がブダ地区に王宮を整備してハンガリー王国の首都としたことからハンガリーの中心となる。しかし、1541年からの約150年間に及ぶオスマン・トルコの支配下では、多くの人々がイスラム教に改宗し、キリスト教会はイスラム教のモスクへと転換される。そして、この時代に造られた特徴的な施設が浴場（温泉施設）であった。17世紀の後半になって欧州のキリスト教勢力がオスマン・トルコを退け、オスマン・トルコに代わったオーストリアの統治下でブダペストは戦乱による破壊状態からの復興を遂げる。1873年にはブダとペストが公式に合併し、ブダペストはオーストリア・ハンガリー帝国の一方の首都となる。この結果、ペスト地区が政治・経済の中心施設の立地する区域として急速な発展をとげることになる。第二次世界大戦では再び甚大な被害を受けたが、復興を果たし現在に至っている。

Ⅲ. ブダペストの観光資源

1. 世界遺産「ドナウ川兩岸とブダ王宮地区とアンドラーシ通りを含むブダペスト」

世界遺産「ドナウ川兩岸とブダ王宮地区とアンドラーシ通りを含むブダペスト（Budapest, including the Banks of the Danube, the Buda Castle Quarter and Andrassy Avenue）」（以下、「世界遺産ブダペスト」と略称）は、1987年に、後述するホッローケー（Holloko）とともにハンガリーでは初めての世界遺産として登録されたⁱⁱ。その時に登録された範囲はドナウ川とその河岸地区ならびにブダ地区の王宮等で、記載名称も「ブダペスト ドナウ河岸とブダ王宮地区（Budapest, the Banks of the Danube and the Buda Castle Quarter）」であった。その後、2002年には、ハンガリー政府が拡大申請したペスト地区の「アンドラーシ通りとその地下を通るブダペスト地下鉄（1号線）（Andrassy Avenue and the Millennium Underground Railway）」が追加登録された。

追加登録後の世界遺産の主要構成資産は、ブダ地区ではブダ王宮・三位一体広場・ゲッレールト温泉等、ドナウ川ではセーチェーニ鎖橋等、ペスト地区では国会議事堂・アンドラーシ通り・地下鉄1号線等であり、いずれもブダペストにおける中心的な観光資源となっている。さらに、これら以外にも、ブダ地区の北方に隣接し古代ローマ時代にこの地域の中心であったオーブダ地区の古代遺跡やオーブダ東辺のドナウ川に浮かぶマルギット島、市街地西方のヤーノシュ山一帯がブダペストの観光資源として位置づけられるⁱⁱⁱ。

2. ブダ地区

世界遺産ブダペストの構成資産のうちブダ（Buda）地区に位置するものについて、その概要を以下に記す。

①ブダ王宮（ブダ城）：ブダ王宮は、ドナウ川西岸のブダの丘

の南部に位置する。ブダの丘に初めて王宮を建設したのは、13世紀のハンガリー王・ベーラ4世。モンゴル軍に追われて国外に逃亡していた王は、ハンガリーに戻った後、首都をエステルゴムからブダに移してブダの丘に王宮を建設した。15世紀には中央集権化や軍隊の整備で国力を充実させたマーチャーシュ王のもとで宮廷文化が花開き、ブダ王宮の最盛期を迎える。マーチャーシュ王の死後の16世紀半ばに、ハンガリーはオスマン・トルコの支配下にはいり、王宮は兵舎や馬小屋に転用されたという。17世紀後期にはオスマン・トルコとオーストリアによるハンガリー争奪戦の戦場となって壊滅的な被害を受けるが、その後修築改築を繰り返し、オーストリア・ハンガリー帝国時代の20世紀初頭に現在の姿に整備される。しかし、第二次世界大戦時にドイツ軍の基地となって内装等は破壊されてしまい、戦後の1950年代によりやく修復された（図2）。現在はブダペスト歴史博物館となっている王宮の建物内部には、ゴシック・ルネサンス期の宮殿や礼拝堂などの遺構が部分的に地下に残されて展示スペースとなっており、重層する歴史を体感することができる。

②マーチャーシュ教会と三位一体広場：ブダの丘の中央部付近に建ち、起源は11世紀に遡るというマーチャーシュ教会は、幾度かの修築改築を経た後、15世紀にマーチャーシュ王によって聳え立つ尖塔が加えられ、概ね現在見るような壮麗な姿となる（図3）。1541～1686年のオスマン・トルコ時代には、教会はイスラム教のモスクに改装されてしまうが、ハプスブルグ家によるトルコからのブダ奪還によって、キリスト教会に回復する。その前面には三位一体広場が広がり、マーチャーシュ教会はブダの丘の最も傑出したランドマークとなっている。

③漁夫の砦：漁夫の砦は、マーチャーシュ教会・三位一体広場の東側、ドナウ川を望むブダの丘中央部東辺に位置する。七つの小塔とそれをつなぐ廻廊などで構成されるロマンチックな外観の展望施設で、ドナウ川やそこに架かるセーチェーニ鎖橋などの橋梁ならびにドナウ川に面して建つ国会議事堂を始めとしたペスト地区の眺望がすばらしく、一部はカフェ



図2 ブダ王宮（現・ブダペスト歴史博物館）

として利用されている（図4）。この漁夫の砦は、ブダ王宮やマーチャーシュ教会などと直接関係するものではない。1896年に行われたハンガリー建国一千年祭関連事業の一つとして、周辺環境の美観に配慮した展望施設として建設されたものであり、19世紀末のブダペストの都市整備における景観への高い意識を窺うことができる。

- ④ゲッレールの丘：ゲッレールの丘は、ブダ王宮の南方にある標高 235 m の小丘陵である。その地形から、19 世紀半ばにはオーストリアにより丘の頂上付近に要塞が構築され、ブダペストを監視する役割を果たしていた。エルジェーベト橋の西のたもとからは、樹木に覆われた丘の中腹に立てられた十字架を掲げる聖ゲッレールの彫像が目を引く。ゲッレールは 11 世紀のヴェネチア人宣教師で、ハンガリーでキリスト教の布教に努めたことから聖人に列せられている。遊歩道に導かれて登っていくと随所でドナウ川や対岸のペスト地区方面への眺望が開けるが、北方のブダの丘も視野に入る丘の頂上付近からのパノラミックな眺望は素晴らしい（図 5）。また、丘の頂上にはシュロの葉を両手で掲げた巨大

な女性像のモニュメントがある。これは第二次世界大戦でドイツ軍を退けてブダペストに侵攻したソ連によって建設されたもので、その巨大さゆえにドナウ川沿いのいたるところから視認することができる。

- ⑤ゲッレールト温泉・ルダッシュ温泉・ラーツ温泉：ブダペストは温泉に恵まれた地として知られており、市内には複数の温泉入浴施設がある。そのなかで世界遺産の構成資産となっているのが、ゲッレールト温泉・ルダッシュ温泉・ラーツ温泉である。ゲッレールト温泉は、その名の通りゲッレールの丘の東麓にあり、1918 年にホテルと温泉を合わせた施設として開館した。建物の外観や内装の意匠はアールヌーヴォーの風貌を見せ、観光者の人気が高い。温泉施設は、ホテルの宿泊客だけでなく、立寄客も利用できる。温泉プールのほか温度の異なる複数の大型浴槽があり、さらにマッサージやエステといった施設が併設されている（図6）。

ルダッシュ温泉とラーツ温泉もゲッレールの丘の麓に位置し、ゲッレールト温泉と同じ泉脈上に位置する。いずれもオスマン・トルコ時代から温泉として利用されていた歴史を持ち、トルコ式のドーム内に八角形の浴槽といった構造・意匠が特徴的である。



図3 マーチャーシュ教会



図4 漁夫の砦



図5 ゲッレールの丘からの眺望



図6 ゲッレールト温泉プール

3. ドナウ川

世界遺産ブダペストでは、ドナウ川とそこに架かる橋等も構成資産となっている。以下、それらの橋の概要を示す。

- ①セーチェーニ鎖橋：ドナウ川西岸のブダ地区と東岸のペスト地区をつなぐ橋としてドナウ川に最初に架けられたのが、セーチェーニ鎖橋である（図7）。全長 380 m のこの橋の開通は 1849 年。その建設を企画・推進したのはブダの貴族セーチェーニ・イシュトヴァーン伯爵であった。第二次世界大戦末期、ブダペストを占領していたドイツ軍が退却する際に破壊されたが、最初の開通からちょうど 100 年後の 1949 年に修復された。橋の両側のたもとに据えられたそれぞれ 2 頭のライオン像が特徴的で、中央の車道の両側に歩道が設置されているため、歩いて渡りながらドナウ川ならびにその兩岸のブダ地区・ペスト地区の景観を楽しむことができる。夜はライトアップされた姿が美しい。
- ②マルギット橋：セーチェーニ鎖橋の上流に架けられた橋で、ドナウ川の中州であるマルギット島の南端からの突出部が橋の中間地点となっている。北を見ると間近に緑のマルギット島が迫るとともに、南にはセーチェーニ鎖橋が美しい全容を見せる。
- ③エルジェーベト橋：セーチェーニ鎖橋の下流に位置する橋。架橋は 1903 年で、その名称はハンガリー国王を兼ねていたオーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフの妃であったエリザベートに由来する。当初は美しい装飾が施されていたが、この橋も第二次世界大戦末期にドイツ軍に破壊され、戦後は機能的なデザインの吊り橋として再架橋された。

4. ペスト地区

世界遺産ブダペストの構成資産となっている構成資産のうちペスト（Pest）地区に所在するものについて、その概要を記す。なお、ドナウ河岸エリア以外の近代遺産は、2002 年の追加登録によって世界遺産となったものである。

- ①聖イシュトヴァーン大聖堂（ドナウ河岸エリア）：聖イシュトヴァーン大聖堂はハンガリー初代国王聖イシュトヴァーンに捧げられたブダペスト最大の教会で、1851 年から 1905 年まで

50 年以上の歳月をかけて造営された。その長さは 86m、幅は 55m、ドームの高さは 96m で、収容人数は 8000 人という。当初段階で設計を担当した建築家はヒルド・ヨーゼフであったが、その没後にイブル・ミクロシュ、さらにカウセル・ヨーゼフという二人の建築家に引き継がれた。そのため、東西の両側面はネオ・クラシック様式、正面と背面はネオ・ルネサンス様式と異なったが採用されている。

- ②国会議事堂（ドナウ河岸エリア）：1885 ～ 1904 年にかけて、シュティンドル・イムレの設計によりドナウ川東岸の鎖橋とマルギット橋の間に建設された。ドナウ川に沿う南北長は 268 m、東西幅は 118 m、ドームの高さは 96 m。ネオゴシック様式を基本とした折衷様式の巨大な建築である（図8）。類まれな壮大さを誇る国会議事堂として、ブダペストだけでなくハンガリーのシンボルともなっている。
- ③アンドラーシ通り：ペストの中心エルジェーベト広場から英雄広場まで続く 2.5km の街路で、19 世紀末のブダペストの計画的都市整備のなかで拡張整備されたものである。街路の名称はオーストリア・ハンガリー帝国発足時の首相で、この街路の企画立案者であったジュラ・アンドラーシに由来する。ドナウ川に近いエルジェーベト広場からオクトゴン交差点までは商業地域であるが、沿道にはハンガリー国立歌劇場なども建つ。一方、オクトゴン交差点から英雄広場までは街路樹の緑濃い高級住宅街で、外国の大使館なども見られる（図9）。



図8 国会議事堂



図7 セーチェーニ鎖橋



図9 アンドラーシ通

- ④ブダペスト地下鉄1号線：アンドラーシ通りの整備に際してその地下に建設された地下鉄である。開通は建国一千年祭が挙行された1896年で、ヨーロッパ大陸では最初の、またヨーロッパ全体でもロンドンに次いで二番目に古い地下鉄として知られる（図10）。
- ⑤英雄広場：アンドラーシ通りの終点に位置する広場。その中央には、台座に建国の7人の族長の騎馬像を並べ、塔上にガブリエル大天使を頂く建国一千年モニュメントが建つ（図11）。英雄広場の北側には、アテネのゼウス神殿を模して正面に八本の列柱を配した折衷様式のブダペスト美術博物館がある。また、英雄広場の背後（東）は、1km²の広さをもつ市民公園となっており、その中にはセーチェニ温泉・遊園地・人造湖・ヴァイダフニャド城などが配される（図12）。ヴァイダフニャド城は、1896年の建国一千年祭に際し、



図10 ブダペスト地下鉄1号線



図11 建国一千年モニュメント

コンペで優勝して新たに建設された施設である。

5. オーブダ地区

世界遺産リストに記載された資産以外の歴史的な文化遺産としては、ブダ地区の北方に位置するオーブダ（Obuda）地区の古代都市遺跡・アクィンクム（Aquincum）がある。アクィンクムは、ハンガリーがパンノニアと呼ばれていたローマ時代に、ローマ軍の宿营地から発展した都市である。2世紀初頭には下パンノニア州の州都、2世紀末にはローマの植民都市となって栄えたが、ゲルマン民族の大移動などの影響により4世紀末にはローマ軍はこの地から撤退した。

今も残るローマ浴場跡・ローマ神殿跡・市場跡・邸宅跡・水道橋および給排水施設跡などの遺跡は整備のうえで公開されており、アクィンクム博物館では遺跡に関する展示を見ることができる。

IV. ブダペスト近郊の観光資源

1. ヴィシェグラード

ドナウ川はドイツ南部に源を発し、西から東へと流れ、ブダペストの北方で大きく湾曲して北から南への流れとなり、そこからハンガリー国内をほぼまっすぐに南流したのちにセルビアで徐々に流向を東に変え、ルーマニアを東流して黒海にそそぐ。延長2,860km、流域面積817,000km²、ヨーロッパ第二の大河川である。

ブダペスト北方でのドナウ川の大きな湾曲はドナウベントと呼ばれ、あわせてその一帯の地域もドナウベントと呼ばれる。ドナウ川は東向きから南向きに流向を変える直前に南方へU字型に小さな湾曲を見せるが、ヴィシェグラード（Visegrad）はそのU字の右辺（東辺）の右岸（東岸）北部に位置する。

14～15世紀のヴィシェグラードの繁栄の契機となったのが、モンゴル襲来後の13世紀の半ばにベーラ4世の妻が標高315mのアンデズイト山の頂に築いた山城（要塞）であった。14世紀前半にはカーロイ1世が山麓の平坦地に王宮を造営して宮廷をこの地に移し、15世紀になるとマーチャーシュ王が夏の宮殿として華麗な大宮殿に改造した。その後、王宮は放



図12 ヴァイダフニャド城

置かれて一部は山の崩落土の下に埋もれてしまい、山城もトルコの占領を経て18世紀には破壊されて廃墟となった。埋もれていた王宮の遺跡は1934年に偶然発見され、その後の発掘調査を経て一部が復元整備された(図13)。王宮遺跡は、ドナウベントの雄大な景色を一望できる山城跡(図14)や13世紀半ばの建造とされる中腹のシャラモン塔とともに公開されている。ブダペストからヴィシェグラードを訪れる場合、HEV(郊外電車)で到達できるセンテンドレからの公共交通機関は路線バスとなるため、自家用車やレンタカーを利用しない観光者にとって、アクセスはよいとはいえない。

2. センテンドレ

センテンドレ(Szentendre)は、東向きから流向を変えたあとの南流するドナウ川の右岸(西岸)に位置する。町の東辺をドナウ川が北から南へゆったりと流れるこの街は、14・15世紀のセルビア人の定住後にトルコ占領下で一旦無人化したのが、17世紀末からセルビア人が再度定住化し、18世紀にはセルビアふうの商業都市として発展した。市街地に建つブラゴヴェステンスカ教会と小高い丘に建つプレオブラジェンスカ教会(図15)は、いずれも18世紀半ばに建てられたバロック様式のセルビア正教の教会である。狭い坂道を上ったところにあるプレオブラジェンスカ教会からの市街地・ドナウ川の眺望は趣があ



図13 ヴィシェグラード王宮跡



図14 ヴィシェグラード山城(要塞)跡からのドナウ川

る。ブダペストから北へ約20km、郊外電車HEVで40分ほどの場所であるため、現在では観光地としてもにぎわいを見せている。

3. グドゥルー

ブダペストの北東郊外の町グドゥルー(Godollo)には、オーストリア・ハンガリー帝国皇帝フランツ・ヨーゼフの妃エリザベットがしばしば訪れたお気に入りの宮殿がある(図16)。バロック様式の整った風貌を持つこのグドゥルー宮殿は18世紀半ばに貴族邸館として造営され、19世紀後半にハプスブルグ家の所有となった。第二次世界大戦後にはソ連軍の兵舎に用いられるなど荒廃していたが、建物については概ね修復が完了して公開されている。建物2階の部屋では家具調度やエリザベットに関する資料などが展示され、1階にはミュージアムショップやカフェなどがある。宮殿背面の庭園は未整備であり、今後の修復が期待される。ブダペストからグドゥルーまではHEVで約40分、ブダペストから日帰りで訪れる観光者も多い。



図15 センテンドレのプレオブラジェンスカ教会



図16 グドゥルー宮殿

4. ホッローケー

ホッローケー (Hollókő) は、ブダペストの北東約 100km のチェルハート山系に位置する小村で、住民はパローツと呼ばれるトルコ系の少数民族である。村の南方の小高い丘にあるホッローケー城は 13 世紀のモンゴル侵攻が終わった後に造営された。現在の集落は 17 ～ 18 世紀頃から発展したとされるが、建物の多くは 1909 年の大火後に伝統技法によって再建されたものという。伝統的な民家は藁葺きの入母屋屋根、石灰塗りの白壁、木製バルコニーなどが特徴で、パローツ様式と呼ばれる (図 17)。1987 年に世界遺産に登録された。その評価基準は、伝統的集落・土地利用の観点に立つ (v) である。ブダペストからの公共交通機関は路線バスのみで、本数も極めて少ない。

V. 考察およびまとめ

1. 世界遺産ブダペストの多様な構成要素とその意義

世界遺産ブダペストの特色は、構成資産の多様性である。都市のまとまった区域が世界遺産となっている物件はヨーロッパには少なくないが、ローマは古代、フィレンツェはルネサンス期といった特定の時代に焦点を当てて登録されているものが多い。こうしたなか、ブダペストは、パリ^{iv}と同様に構成資産の時代に多様性がある。すなわち、13 世紀に起源をもち 15 世紀に最盛期を迎えたブダ王宮や 16 ～ 17 世紀のオスマン・トルコ支配の時代に起源をもつ温泉施設と 19 世紀のオーストリア・ハンガリー帝国時代にその帝国の副都としての整備によって建設されたセーチャーニ鎖橋を始めとする橋梁群ならびに国会議事堂・アンドラーシ通り・地下鉄 1 号線、これらがいずれも現在のブダペストを形成する骨格として歴史的・文化的評価を受けているわけである。くわえて都市構造の中核をなすドナウ川ならびにこの川を境に丘陵地のブダと平坦地のペストという地形的に様相を異にする二つの地区で構成されるという空間的な多様性も特筆される。

時間的にも空間的にも多様性を持つ世界遺産ブダペストを考えるうえで重要になるのが、1896 年の建国一千年祭である。このイベントに合わせた都市計画事業によって完成された



図 17 ホッローケー

のは、国家施設たる国会議事堂、アンドラーシ通り・地下鉄 1 号線といった交通施設、さらにブダ王宮の漁夫の砦や市民公園とヴァイダフニャド城といった公園・風致施設であり、そこには近代都市のあるべき姿を実現しようとした意思が強く感じられるのである。そして、そのことを評価した世界遺産の観点は、都市というものの本質的性格である動態性 (変化) とその結果に対する評価に他ならない。

関連して、わが国の京都を考えてみたい。ブダペストの建国一千年祭とほぼ同時期の 1895 年に、京都で平安遷都千百年記念祭が挙行された。その中核をなす施設として建設されたのが平安神宮である。そこには平安時代の平安宮の復元的空間としての建物群と近代性を帯びた神苑が営まれた。京都では、これに先立ち、明治維新後の衰退を救うための事業が実施されているが、なかでも琵琶湖から京都に導水した琵琶湖疏水は、拡張整備を行いつつ今も京都の都市施設として重要な機能を担っている。そうした近代の所産も、現在では、平安神宮神苑が国の名勝に、琵琶湖疏水関連施設 12 か所が国の史跡に指定されており、国内的には文化財としての価値が認定されている。京都では古い寺社等を構成資産として「古都京都の文化財」が世界遺産に登録されている。「古都京都の文化財」が世界遺産に登録された 1994 年の段階では、都市の動態性とその結果の観点よりも、直接的理解が容易な古代から前近代すなわち 9 世紀から 17 世紀頃に限定した京都の歴史都市としての特質を強調することが得策と考えたことは容易に想像できるが、ブダペストに見るような都市の動態性という観点からの時間的多様性の評価を取り入れるならば、平安神宮や琵琶湖疏水も世界遺産級の資産であるとの考えが成り立つと考えられる。

2. ブダペストとその近郊の交通

今回調査した世界遺産ブダペストを包含するブダペストの交通事情ならびにブダペストからセンテンドレ・ヴィシエグラード・グルドゥー・ホッローケーへの交通アクセスの状況を記し、交通と観光との関係について述べておきたい。

①ブダペスト市内 (地下鉄とトラム) ブダペスト市内には、大陸ヨーロッパ最初の地下鉄である前述の地下鉄 1 号線 (M1) のほか、ペスト地区を東西に横切りドナウ川を越えブダ地区の鉄道南駅へと延びる 2 号線 (M2)、ペスト地区のドナウ川沿いを概ね南北に走る 3 号線 (M3)、ペスト地区の鉄道東駅からドナウ川を越えブダ地区の南部に至る 4 号線 (M4) の 4 つの地下鉄路線がある。そして、これらの路線は、M1・M2・M3 の 3 路線が交わる Deak Ferenc ter 駅、M2 と M4 が交わる鉄道東駅、M3 と M4 が交わる Kalvin ter 駅で相互に乗り換え可能であり、ブダペストの公共交通の骨格となっている。さらに、地上には、2 ～ 5 両編成のトラムが地下鉄駅・鉄道駅とも連絡しながら縦横に走っており、その路線が頭に入っていればブダペスト市内の

どこにでも行けるといってよいほどである。したがって、世界遺産ブダペストの各構成資産およびオーブダ地区などは、この地下鉄・トラムに徒歩を加えれば、いずれも容易にアクセス可能である。このような状況のもと、世界遺産ブダペストの観光は、それぞれの構成資産の滞在にそれなりの時間をかけても3～4日程度では網羅できるといってよいだろう。

② HEV（郊外電車）沿線 ブダペスト市内の複数箇所から HEV と呼ばれる郊外電車が各方向へと延びている。例えばブダペストと北郊のセンテンドレを結ぶ 5 号線（H5）は M2 の Batthyany ter 駅から発着し、M2 の東端の Orzvezer ter からは東のグドゥルーへの 8 号線（H8）と H8 から途中で分かれる 9 号線（H9）が発着する。したがって、HEV の沿線にあたるセンテンドレやグドゥルーは、ブダペストからのアクセスの良さから訪れる観光者も多い。

③ 路線バスのみ ブダペスト近郊の HEV の運行地域外で、駅がないあるいは運行本数が少ないなど、鉄道によるアクセスが悪い観光地へのアクセスは自動車または路線バスとなる。今回の調査で訪れたホッローケーやヴィシエグラードはそうした事例で、自家用車やレンタカーではなく路線バスを利用しようとする場合は、事前に発着時刻をしっかりと確認しておく必要がある。特にホッローケーの場合は、午前にブダペストを発車するホッローケー行きバスと午後にはホッローケーを発車するブダペスト行きバスはそれぞれ 1 便であるため、それを逃さぬよう計画をたてる必要がある。

以上に示したように、ブダペストを拠点とした市内と郊外の文化遺産観光にあたっては、市内では地下鉄とトラムの利用で問題なく目的地に到達することができ、郊外においても郊外電車 HEV 運行地域では支障なくアクセスが可能である。一方、HEV 運行地域外で公共交通機関として路線バスのみが利用可能である場所へのアクセスは、世界遺産となっているホッローケーなどであっても相当に不便であり、レンタカー等の自動車を使用しない観光者にとってこうした場所への訪問のハードルは高い。観光者と観光目的地を結ぶ物理的媒体としての交通の重要性は今さら指摘するまでもないが、観光に果たす公共交通機関の重要性については改めて認識しておきたい。

3. 眺望地点

—「支配者の眼差し」から「観賞者の眼差し」へ—

丘陵地帯であるブダ地区において、ブダ王宮・マーチャーシュ教会などが立地するブダの丘やその南方のゲッレールトの丘といった世界遺産の構成資産は、ドナウ川や対岸のペスト地区を見晴らす優れた眺望地点である。ブダ王宮は 15 世紀以降のハンガリー王国の支配の拠点であり、ゲッレールトの丘にもかつては山頂部に要塞が築かれいた。ブダペストを離れると、かつて王宮が置かれていたヴィシエグラードでは、その始まりとなったのが山城（要塞）であり、ドナウを一望する立地こそが、戦略的にもその造営の基盤であった。さら

に、パロツ人の居住する小村であるホッローケーにおいても、中世に造営された城郭は小高い丘の上に建つ。これらに見られる眺望に優れた丘陵上の立地は、戦略上の重要性とともに、そこに建つ施設及び施設の主である支配者の支配性を表象するものであり、世界的にみても多くの事例が見られる現象である^v。そして、そこからの眺望は、とりもおさず「支配者の眼差し」を体現したものに他ならない。

では、時代を経て支配者の拠点としての地位を失った後、そうした地点はどのような変貌を見せるのか。このことを端的に示すのが、ブダの丘にある漁夫の砦である。1896 年の建国一千年祭事業のために築造されたこの施設は、その場所の歴史性に依拠しつつ、訪れる市民らが眺望を享受することを目的としたものであり、かつて「支配者の眼差し」を体現していた眺望は「観賞者の眼差し」として捉えなおされるのである。ゲッレールトの丘も 20 世紀初頭に市民に開放された後は、山頂に向かう遊歩道が整備され、そこからの眺望は「観賞者の眼差し」に供されることになる。ヴィシエグラードの山城もまた、類まれな眺望が観賞者を楽しませ、現状では山麓の王宮跡よりもはるかに多くの観光者で賑わっている。ホッローケーでは集落散策が今の観光の主行動となっているが、ほとんどの観光者は丘の上のホッローケー城まで足を運び、その眺望を楽しむ。いずれも、「観賞者の眼差し」がかつての「支配者の眼差し」に取って代わったと解釈できるわけである。

ジェイ・アブルトンが「眺望—隠れ場理論」として指摘するように、そもそも動物が選択する有利な生存環境は、見ることと隠れることが両立する環境、つまり自らの身は隠しながら周辺を見渡せる環境である^{vi}。人間もまた動物として、広く周囲を見渡せる環境は本能的に好ましいものであり、その意味で眺望地点における「支配者の眼差し」と「観賞者の眼差し」は同根であり、さらには「観光者の眼差し」は「支配者の眼差し」の追体験であるとも言えよう。このことが観光地における眺望に優れた視点場の重要性にも敷衍できることは、言うまでもない。

本稿は、和歌山大学国際観光学研究センターの平成 30 年度研究費で筆者がおこなったブダペストとその周辺の観光資源現地調査（2019 年 3 月 21 ～ 27 日）の成果の一部である。なお、2016 ～ 17 年度に留学生として和歌山大学大学院観光学研究科に在籍した Demarcsek Eva さんから事前ならびにブダペスト現地でいろいろと情報提供を受けた。記して感謝の意を表したい。

文献

- 1) ユネスコ世界遺産センター世界遺産リスト <https://whc.unesco.org/en/list/400/> Budapest, including the Banks of the Danube, the Buda Castle Quarter and Andrassy Avenue
- 2) 『世界遺産大辞典＜下＞』世界遺産検定事務局 マイナビ出版

2016

- 3) 『新編西洋史辞典（改訂増補）』京大西洋史辞典編纂会編 1993
東京創元社
- 4) 『ベラン世界地理大系7東ヨーロッパ』田辺裕・竹内信夫監訳 2008
朝倉書店
- 5) プリタニカ国際大百科事典
- 6) 『ハンガリー史1・2（第2版）』パムレーニ・エルザイン編／田代文雄・
鹿島正裕訳 恒文社 1990
- 7) 『世界の歴史と文化 中欧』沼野充義編 新潮社 1996
- 8) 『ブダペスト旅物語』外山純子 東京書籍 2006
- 9) 『地球の歩き方 A27:ハンガリー 2017～2018年版』ダイヤモンド・
ビッグ社 2017

註

- i 「数字が語る旅行業 2018」一般社団法人日本旅行業協会
https://www.jata-net.or.jp/data/stats/2018/pdf/2018_sujryoko.pdf#search=%27%E3%83%8F%E3%83%B3%E3%82%AC%E3%83%AA%E3%83%BC%E8%A6%B3%E5%85%89%E7%B5%B1%E8%A8%88%27
(2019年5月5日アクセス)
- ii 世界遺産ブダペストの評価基準は (ii) と (v) である。
(ii) to exhibit an important interchange of human values, over a span of time or within a cultural area of the world, on developments in architecture or technology, monumental arts, town-planning or landscape design
(v) to be an outstanding example of a traditional human settlement, land-use, or sea-use which is representative of a culture (or cultures), or human interaction with the environment especially when it has become vulnerable under the impact of irreversible change.
- iii 『地球の歩き方 A27:ハンガリー 2017～2018年版』では、「ブダペストの歩き方」の項で、観光対象地区を「くさり橋と王宮の丘」「国会議事堂とヴァーツィ通り」「アンドラーシ通りと英雄広場」「ゲッレールトの丘と周辺」「ヤーノシュ山と周辺」「オーブダ周辺とマルギット島」の6つに区分している。
- iv 世界遺産「パリのセーヌ河岸 (Paris, Banks of the Seine)」の構成資産には、12世紀のノートル・ダム大聖堂や19世紀の都市計画の中で建設されたエッフェル塔といった大きく時代の異なるものが含まれる。
- v 日本における近世城郭の嚆矢である安土城をはじめ、和歌山城・松山城・姫路城などその主流を占めるのが平山城でる。欧州に目を向けても、例えばスコットランドでは、エジンバラ城やスターリング城などの主要な城が丘陵上に立地する。
- vi 『風景の経験—景観の美について』ジェイ・アプルトン（菅野弘久訳）法政大学出版局 2005。「眺望—隠れ場理論」は pp.94-99.

受理日 2019年12月16日